

# 2002年度交換留学生の紹介

## 【派遣学生（7名）】

今年の夏から約10カ月間、海外の協定校で一生懸命学んでいます。

次はあなたの番です。積極的にチャレンジしてください。

氏名(所属)	派遣先大学
根本 紀子 (英米文4年)	モンタナ大学(アメリカ)
関 織母 (英語コミュニケーション3年)	
大澤 美和 (英語コミュニケーション2年)	
青木 敦志 (英語コミュニケーション3年)	ミズーリ大学セントルイス校 (アメリカ)
宮崎 研介 (教育3年)	ダブリンシティ大学 (アイルランド)
吉田 政子 (英語コミュニケーション3年)	
加藤 絵美 (英語コミュニケーション3年)	

## 【受入学生（6名）】

9月から、主に白山キャンパス開講の授業に出席しています。2003年7月まで本学で学びますので、どうぞよろしくお願ひします。

氏名(本学での所属)	在籍大学
チェルシー・ドウエロ(女) Chelsie Dwello (英語コミュニケーション)	モンタナ大学 (アメリカ)
アール・イエイツ(男) Earl Yates (社会心理)	マールブルク大学 (ドイツ)
コリンナ・フーフェルド(女) Corinna Hoehfeld (社会文化システム)	
シュリン・ワン(女) Shu-Ling Wang (経済)	マルク・ブロック大学 (フランス)
ジェレミ・ムサ(男) Jérémy Moussa (日本文学文化)	ダブリンシティ大学 (アイルランド)
コラム・カフリ(男) Colm Caffrey (法律)	



写真左から  
ジェレミ・ムサ君  
シュリン・ワンさん  
コラム・カフリ君  
チェルシー・ドウエロさん  
アール・イエイツ君  
コリンナ・フーフェルドさん

# 留学生 レポート

2002 No.9

オレゴン州立大学(交換留学)  
2001年9月~2002年6月

横田 知明君  
(国際地域学科 平成14年9月卒業)

以前からボランティアに興味があり、「世界中の人たちと知り合いになれる」と1年生の夏休みに非営利団体「国際ボランティア」に参加した。日本の過疎地でキャンプを張って農家の手伝いや植林作業を行ったり、地元の子どもたちと交流したりするのが主な活動だ。その中で様々な国から参加した学生たちをまとめあげるリーダーの姿を見て、「よし、来年は自分も...」と決意したという。

翌年晴れてリーダーになった横田君。しかしその仕事は容易なものではなかった。まず言葉が通じない。「英語は人並み以上に勉強していたはずなのに...。国内での勉強だけじゃダメだ」。学内の交換留学の制度を知り、3年から猛勉強に入った。

「実は(留学前は)アメリカはあまり好きな国ではなかった」と打ち明ける横田君。それまでのボランティア活動を通して見てきたアメリカ人のイメージが芳しくなかったためだ。「でもそれは一部の人たちだけかもしれない。違う面も見てみたい」、そして、大学を中心とした「町づくり活動」が進んでいるというアメリカで実際に現状を見てみたい」との思いの方が強くなった。

着いた早々の9月11日、同時多発テロが起こった。大学では皆がテレビでニュース

映像を食い入るように見つめていた。横田君には事件そのものより、むしろそうした米国人の姿が印象的だったという。

新学期では急遽テロに関係する講義も多く開講された。一番興味を持って受講したのはキリスト教文化とボランティアリズムについての講義。教授は、一人英語が分からない横田君のために、いつも残って特別に相手をしてくれたという。1学期は授業が終わるや図書館に直行して夜中まで勉強、日本人学生たちとの深い接触は避け、米国人の中に身を置くことに努めた。

しかし2学期以降は勉強ばかりで内に籠りすぎていたことを反省、「アメリカでできないことがあるはず」と気持ちを切り替えたら、心に余裕が出てきて現地の友達も増えたという。週末はパーティやイベント、ボランティア活動に参加するなど学生生活を楽しんだ。

これから留学する学生にアドバイスとして「何もしないと何も始まらない。やりたことははっきりさせておくこと。自分から動けば受け止めてくれる土壌がアメリカにはある」。横田君にとつての米国での1年は、「小説の1ページ目みたいなもの。これから面白くなるのに...」と物足りなそうだ。4月からはインターネット関連業界に就職が決まっている。「機会があればいつかアメリカの大学院でも学んでみたい」と目を輝かせた。



課外活動でのひとコマ(左から2人目)